

## 28 階段の怪談

星野博美

人は何を、どんな理由で恐怖するのか。

そしてそれは、歳月とともにどのように変化していくのか。

そんなことを時々考える。

小さい頃、夜が怖かった。

私は大家族のなかで最年少の人間として育った。家には常に誰かがいて、たとえ数分間にせよ、一人きりで過ごしたことはない。それでも夜

が怖かった。

トイレももちろん怖かった。うちのトイレは昭和四十七年まで、小学校のトイレは昭和四十九年まで汲み取り式で、足を踏みはずしたら奈落の底に落ちるといふ現実的な恐怖があった。便器の穴から手が出てくる、という怖い話のイメージは、汲み取り式が発想基盤にあるはずだ。現代日本の子どもがあればほどトイレを怖がるかどうか、私は知らない。

特に恐れたのは、家の階段だった。一階と二階をつなぐ、何の変哲もない階段だ。私はそれを、一人では登らないことに決めていた。家には誰かがいて、しかも私は年子の姉の金魚の糞だったので、待っていれば必ず誰かが階段を登り降りする。それにくつついていく。一人で階段を使うと、別の階に連れて行かれて二度と戻って来られない。それを恐れ

ていた。

そして階段を使う時は、必ず数を数えた。いつの間にか段数が変わっていて、異次元の世界に連れて行かれることを阻止するためだ。幸いそんなことは一度も起きなかったが、いまでも私は無意識のうちに段数を数えてしまう。

夜になると、階段はさらに怖くなる。階段は狭い。右と左の壁が、昼間より狭くなったような気がする。そしてそこから手が伸びてきて自分の首ねっこを押さえ、壁に引きずりこむ。それは一瞬のうちに遂行されるので、前をゆくお姉ちゃんは気づかない。階段を登り終わったあとで、お姉ちゃんが後ろを振り返る。あれ？ 妹が後ろからついてきたはずなんだが、姿がない。気のせいか。そしてしばらくしてから、家のどこに

も妹がいないことに気づく。その頃私はもう、取り返しがつかないほど遠くの世界へ連れ去られている。

昼間は何の変哲もない家が、夜になると何か別の存在に支配され、勝手な行動を取り始める。それはまさに「世界の支配者が変わる」という感じで、隙あらば自分をさらっていかうとする。

客観的に見て、家に常に誰かがいた当時の私は、最大限安全を保障された子どもだったといえるだろう。友達には親が外で働く「鍵っ子」がたくさんいたし、家で大人のいない時間を過ごさなければならぬ子はもつと怖い思いをしていたはずだ。彼らに比べたら、私の恐怖などちよろいものだ。逆説的に言えば、安全が確保されていたからこそ、少しでもそれを脅かす存在が怖かったのだろう。

子どもの頃は語彙が足りないので、怖い存在をすべて「おばけ」に集約させ、「おばけが怖い」と認識していた。

そんな話を、スピリチュアル話が大好きな友人にしたことがある。彼女はこの話を大喜びし、以下のような解説を施した。

子どもは、往々にして大人よりも「靈感」が強い。だから大人が感知できない様々な気配を感知する。なぜか。それは、生まれ変わってから時間がそれほどたっておらず、過去世の記憶が残っているからだ（彼女は、前世とは一回とは限らず、何度も生まれ変わりを繰り返すという考えの持ち主だったので、「前世」ではなく「過去世」という言葉を好んだ）。しかし大人になって今世の記憶が増えるにつれ、残念ながらその

感度は鈍り、いつしか失われていく。それを失わずに維持している人こそ、「靈感」が強い人なのだ。あなたはかつて、それを持っていた。がんばって磨けば、いずれ再獲得できるはず。

私の反応は「はあ……。ん？」だった。大人が感知しない何かを子どもが感知する、それは自分の経験からも認めよう。だからこそ、何もかもが怖かった。しかしそれが「前世」、いやいや、「過去世」から経過した時間云々と言われると、私の思考回路はそれを受け容れるようにはプログラムされていない。

しかも、磨けば再獲得できる？ 感知すると怖いものだから、二度と獲得などしたくない。

ヒトと猫を比較するのは私の悪い癖なのだが、猫には本当に教えられることが多い。

四半世紀ほど前になるが、「猫を飼う」と正式に決心する暇もなく、野良猫が外で産んだ仔猫を次々に連れて来て猫生活に突入し、一時期は部屋が仔猫幼稚園の様相を呈したことがある。

野良猫の子どもにとって、世界は危険に満ちた場所だ。たった一日降り続いた雨が命を奪うこともあるし、母猫が留守の間に他の猫に襲撃されることも少なくない。実際、私の目の前で仔猫が襲撃されたこともある。生存できるか否かは母猫の双肩にかかっている。仔猫にできる努力といえば、母猫から一刻も早く生存方法を学び、危険を察知したら息を潜めて隠れることくらいしかない。

仔猫の世話をしながら、日々彼らの生態を観察した。

仔猫はひとりぼっちが嫌いだ。母猫がいればびたりとくつつき、いなくなればきょうだいと寄り添う。それもいない場合は、私の体のどこかに乗ってくる。それを当時は「愛だ」と勘違いしていたが、要は自己防衛のためだ。

日中は彼らをアパートの庭で思う存分遊ばせた。仔猫は狂ったように遊び、きょうだいとの喧嘩を通して、生存に必要な戦い方や身の守り方を身に付けていく。そこへ誰か侵入者が現れると、蜘蛛の子を散らしたように逃げまどい、物陰に隠れて安全を確保する。切羽つまると、木の上でも洗濯場の屋根でも、どこにでも登る。私が近所のコンビニへ行こうとすると、あとを追ってくる。しかし私がアパートの敷地から一步外



に出ると、彼らはピタリと足を止め、庭へ帰っていった。自分のテリトリから外に出ると、安全は確保されない。そのことを本能的に知っていたのである。それをかたくなに守ったからこそ、彼らは無事に生き延びることができた。

子ども時代の自分と仔猫の生態を重ねあわせると、得体の知れない恐怖の正体がぼんやりと見えてくる。

私がつりわけ恐れたトイレと階段が象徴するのは、二つの世界をつなぐ場所、だろう。これらの住宅設備は、昼間は正常に機能する。しかし夜になると支配者が変わるので、正常に機能しなくなり、帰属先が曖昧になる。そして弱い存在を狙い、異界に呑みこむ。異界、つまりテリトリの外だ。

自分は最年少なので、とてもか弱い存在だ。誰かがいないと生きていけない。そしてテリトリーから離れると、安全は保障されない。幸い、両親や祖父母が自分の安全を確保してくれている。しかし家の中に、異界へ通じる穴が潜んでいる。だから怖い。

私の恐怖は、仔猫の恐怖とまったく同じ類のものだ。

「靈感」が強いから怖かったのではない。生存したいから、怖かったのだ。そして、正しく恐れる子のほうが生き延びることは、仔猫たちが証明していた。

私はいま、トイレも階段も怖くない。左右の壁が迫ってきて首ねっこを掴まれることより、踏みはずして骨折することのほうが怖い。駅でも

必ず手すりに掴まり、ゆっくり登り降りする。

夜も、あまり怖くないつもりだ。しかしこの歳になっても宵っぱりの生活を改めず、日が昇ってから寝るあたりを見ると、まだ夜が怖いのかもしれない。

生きたいと思う限り、恐怖は形を変えて続く。せいぜい、恐れようぞ。